

■展覧会案内

# 企画展「よろい・かぶと・かたなの世界」

会期：令和元年9月21日(土)～11月24日(日) 会場：特別展示室ほか

この展覧会は、武家の象徴として現代に伝えられる甲冑や刀剣、刀装具などを紹介するものです。本来実用的な側面を持つ武具や武器は、戦闘方法の変化や技術の進歩によって、様式が変化しました。また、実用的な側面とともに、武士の個性が反映され、工芸品としての側面も併せ持っています。ここでは、展示の内容から一部を紹介しします。

## 1 かぶとの誕生

古墳時代から江戸時代に至るかぶとの移り変わりを紹介します。古墳時代前半は鉄板を革で繋ぎ合わせるのが主流でしたが、中期に入ると、鉄製の鋳が使用されるようになりました。平安時代には、鉄板を接合する鋳を突起状に加工した星兜が主流となりました。一方、南北朝時代以降に登場するのが、筋兜です。筋兜の筋は、鉄板を繋ぎ合わせた際に形作られました。時代が下るにつれて繋ぎ合わせる鉄板の枚数が増え、強度が増しました。図-1は、12枚の薄い鉄板を繋ぎ合わせて作られた、軽く簡素な作りの兜です。



図-1 鉄錆地十二枚張兜鉢 (岩手県立博物館蔵) 【岩手県指定有形文化財】 室町時代

戦国時代の槍隊や鉄砲隊が使用したと考えられます。兜は防具であると同時に、前面に付けられる「前立」などの装飾によって、武士としての意思が示されました。

## 2 よろいの移り変わり

よろいの様式は、戦闘方法の変化に応じて変化しました。大鎧(図-2)は、馬上で弓を持って戦う騎射戦に対応して、平安時代に成立したよろいです。胴は小札という、革や鉄製の小さな板を糸



図-2 白糸威裃取鎧 兜 大袖付(模造) (個人蔵) (原資料【国宝】柳引八幡宮蔵 南北朝時代)

で連結(おど)して作られました。上腕部を守る大袖や、相手の放つ矢から胸を守るために柵板や鳩尾板を備えています。また、下腹部を守る草摺は、前後左右の4枚(四間)に分かれ、防御に適しています。南北朝時代から室町時代にかけて、戦闘方法の主流は騎射戦から徒歩中心の戦いに移ります。そこで下級の武士が着用していた簡素な武具が発展した胴丸や腹巻が登場します。草摺の枚数が8枚に増えて機動力が高まりました。胴丸が右脇で胴を引き合わせるのに対し、腹巻は背中引き合わせて着用しました。胴丸や腹巻は小札を糸で連結して作られたため、大量生産に不向きでした。これに対し、大きな鉄製の板や蝶番を利用し、戦国時代の鉄砲による戦いに対応した、機能的で生産性の高い新しい様式が作られました。これは、佩楯や面頬など全身を防御する部品(具足)

を備えていることから、「当世具足」と呼ばれました。戦国時代から江戸時代にかけてよろいの中心的なスタイルとなり、二枚胴や五枚胴、最上胴などのバリエーションが登場しました。桃山時代には、当世具足の一つとして、ヨーロッパ伝来の胴をアレンジした南蛮胴が登場します。

## 3 盛岡藩のよろい

ここでは、江戸時代中期の盛岡藩主所用のよろいを紹介します。

南部利正(1751-1784)が元服の際に着用したと伝えられる卯花威紅羅紗地唐獅子牡丹文二枚胴具足(図-3)は、胴が紅色の羅紗地で包まれ、正面に唐獅子、背面に牡丹の刺繍が施されています。草摺にも牡丹の刺繍が見られます。兜の内部には「天文」の文字が刻まれていることから、古い兜を利用したことが分かります。南部利正は、家督を継いで3年後に、33歳の短い生涯を終えました。



図-3 卯花威紅羅紗地唐獅子牡丹文二枚胴具足 (岩手県立博物館蔵) 【岩手県指定有形文化財】 江戸時代

## 4 武将が愛した甲冑

戦国時代後半から江戸時代にかけての武将たちのよろいを紹介します。

秋田の佐竹義重、米沢の上杉景勝、仙台の伊達政宗所用のよろいを通じ、戦国武将としてのそれぞれの生き方を浮き彫りにします。米沢を支配した上杉景勝(1556-1623)の具足(図-4)は、徳川家康が関原の戦いに先立って景勝の征討に赴いた際に、景勝が着用していたと伝えられるものです。兜は62枚の細長い板を繋ぎあわせて作られています。前面に立てられている前立は阿吡の瑞鳥です。



図-4 浅葱糸威黒羅紗包板物二枚胴具足 (公益財団法人宮坂考古館蔵) 【山形県指定有形文化財】 室町時代

## 5 古文書にみるよろい・かぶと

江戸時代の甲冑や刀剣の情報ほどのように古文書に記録されていたのでしょうか。盛岡藩が所蔵した武具や刀剣のうち、盛岡城の「御蔵」で保管されたものは台帳に記載され、厳重に管理されました。文化13年(1830)に作成された『御宝蔵御具足帳』には、南部重信所

用の「金小札茶糸御具足」(金小札茶糸緘二枚胴具足)を筆頭に、南部利幹所用「小札紫糸威御具足」(銀本小札紫糸威二枚胴具足)などが記載されています。なお、具足の一覧には所在確認を行った際の確認印として、干支の印が捺されています。鎧兜は、正月の行事の際に展示が行われました。安政3年(1856)『御具足櫃開閉立合帳』(図-5)には、正月十三日に「御具足御飾」が行



図-5 御具足櫃開閉立合帳 (もりおか歴史文化館蔵) 安政3年(1856)

われ、翌日に「仕舞」されたことが記されています。また、七月二十三日には、「御具足虫干」が行われたことが記載されています。所蔵するよろいやかぶとの管理に気を配っていたことがうかがわれる記述です。

## 6 異形の美～「変わり兜」の世界～

兜は、頭部を守る武具として進化を遂げてきました。一方、桃山時代以降大規模な戦闘が減少すると、鉄の兜の上に和



図-6 黒漆塗執金剛杵形兜鉢 (靖國神社遊就館蔵) 江戸時代

紙や革などで様々な形を作る「張懸」という技法によって、個性的な「変わり兜」が盛んに作られました。変わり兜には、戦場に赴く武士の決意が反映されており、仏教に関わるデザインが施されている兜も散見されます。黒漆塗執金剛杵形兜鉢(図-6)は、金剛杵という仏具を手握った形が表現されています。表面には黒漆が塗られ、「盾庇」には眉やしわが表現されています。金剛杵はインド神話に武器として登場し、密教では煩惱を破壊して悟りを開くために用いられます。

## 7 刀工の業&刀装具の世界

ここでは、重要文化財「太刀銘助真」(図-7)を中心とする日本刀と、鞘や鐺などの拵を紹介しします。助真は、鎌倉時代中期(13世紀後半)に活躍した備前国(現在の岡山県)福岡一文字派の刀工です。幕府の招きで鎌倉に下向し、鎌倉一文字派を興したと伝えられます。反りが深く、切先に向かうにつれて細くなっていく優美な姿で、刃文は丁字乱れと互の目乱れが入り混じり、独特の美しさを創り出しています。



図-7 太刀銘 助真 (岩手県立博物館蔵) 【重要文化財】 鎌倉時代中期

一方、拵のうち雉子尾雌雄御太刀は、室町時代に南部義政が将軍足利義教から拝領したものと伝えられます。この拵は、太刀の持ち手部分である柄の先端部分「柄頭」が雌雄の雉子の形に作られており、二口で一組でとなります。雄は赤銅で作られ、雌は金で作られています。

きっと、個性的な「よろい・かぶと・かたな」と出会えるはず。ぜひお越しください。  
(専門学芸調査員 原田 祐参)